

今年の干支は「丑」です。その干支にちなんで、今回は牛（鹿児島弁で「べぶ」）の歴史について紹介します。

## 農業と牛

日本人にとって牛は昔から大事な存在でした。稲作と同時期に牛も日本に持ち込まれたといわれるように、農業と牛は切っても切れない関係です。

昔は牛に馬鍬を付け田畑を耕し、農作物などの重い荷物も牛に載せて運んでいました。馬と並んで農家にとって必要な存在であり、財産でもありました。一家に牛と馬を1頭ずつ持っている農家がほとんどで、裕福でない農家は牛を借りていたようです。

『霧島町郷土誌』には、霧島田口辺りで牛を持っていない人は、田植えの時期だけ牛根地区（垂水市）辺りから牛を借りていたという記述があります。これを「あげ牛」と呼び、3農家で1頭を借り、借り賃はお米で支

# 郷土への扉

The gateway to local history



霧島神宮御田植祭の田の神舞で登場する神牛

# 牛

払うことで、田んぼの少ない牛根地区と共存していたのです。借りてきた当初は肥えていた「あげ牛」も返すときにはやせ細っていたようで、牛が農繁期にどれだけ働いていたのかが分かります。

現在に残っている祭りからも、農業における牛の大切さを知ることができます。鹿児島で春にある御田植祭では、踊りや劇の重要な登場物として牛が出てきます。

県の無形民俗文化財である「霧島神宮御田植祭」では、境内を田んぼに見立てて田植えなどを模擬的に行う田の神舞が行われます。土を掘り返す田すきの場面では、牛の面をかぶった人が神牛を演じます。神牛面



牧園町の寺原地区にある寺原豊受神社

には「宝永三年七月吉日 鳥井重行作之也」とあり、作成年月日と製作者の名前が記されています。宝永3年は1706年ですので、面が30年以上大事に使用されていることからも、いかに牛が重要な役割を担っていたかが分かります。

ちなみに、祭りで牛が登場するときには薩摩地域では牛の面、大隅地域では牛の人形が用いられます。

## 食事と牛

江戸時代以前は、仏教で獣の肉を食べることが長らく禁忌行為だったこともあり、農業で必要不可欠な牛を食べることはありませんでした。

明治になり、欧米文化が入って文明開化が起こると、牛鍋が東京で流行。全国で食べられるようになり、戦後、食文化が欧米化する中で食用牛の畜産が広がり、鹿児島県、霧島市でも和牛の生産が増えていき

ます。

いまや品質の高さで有名な鹿児島和牛。昭和45年に鹿児島県で開催された第2回全国和牛能力共進会では国分和牛が日本一を獲得しました。来年10月には第12回共進会が鹿児島県で42年ぶりに開催され、牧園町が牛の改良の成果を競う「種牛の部」の会場となっています。

牧園町の寺原地区にある寺原豊受神社には畜産の神様が祭られています。境内にある「種雄牛 山丸号之碑」によると、昭和30年から11年間で鳥取県産の種雄牛・山丸号によって子牛4225頭が生産されたことで町の和牛の質が向上し、市場価値が高くなったと記されています。子牛1頭10万円と単純計算しても4億円以上です。

農業も畜産も人間の力だけではなく牛のおかげで発展し、今日につながっているのですね。

(文責 小水流)

## 隼人塚史跡館特別企画展

### 今こそ、隼人

「隼人」について、展示数を増やし、分かりやすい説明付きで展示します。

期間 12月28日(火)まで

場所 隼人塚史跡館 隼人町内山田287-1

入館料 大人150円、高校生以下80円

※「記念物百年」展も3月31日(水)まで同時開催。